



日本プライマリ・ケア連合学会
四国ブロック支部



発行人：阿波谷敏英,川上和徳
事務局 〒761-2103
香川県綾歌郡綾川町陶 1720-1
綾川町国民健康保険陶病院気付
副支部長/事務局長 川上和徳
Tel. 087-876-1185 Fax. 087-876-3795
E-mail jpicardk@yahoo.co.jp

★ 2025 年度 四国ブロック支部 家庭医療/総合診療専攻医オリエンテーション&ポートフォリオ発表会を開催
所属： 高松平和病院 植本真由

2025 年度 日本 PC 学会四国ブロック支部 家庭医療/総合診療専門研修 オリエンテーション・ポートフォリオ発表会が、2025 年 4 月 26 日（土）13 時 30 分～16 時 30 分、香川大学医学部附属病院福利厚生施設棟 2 階マルチスペースとオンラインのハイブリッド形式で開催されました。

今年度は四国各県それぞれに新専攻医が誕生しました。参加者は総勢 72 名（現地参加 45 名、オンライン参加 27 名）と、新専攻医オリエンテーションとしては最多の参加人数となりました。新専攻医 7 名（オンライン 2 名）、2 年目以上の専攻医 3 名、指導医・その他が 62 名で、医学生の参加者もおられました。

開会の挨拶を、市来智子先生（香川大学）よりいただきました。

新専攻医の自己紹介では家庭医や総合診療医を目指した理由や多彩な趣味を紹介され、会場は盛り上がっていました。



専攻医部会の紹介を、馬越隆光先生（香川県立中央病院）からいただきました。

ポートフォリオ発表会では、専攻医の前田佳純先生（高知県立あき総合病院）に領域[人生の最終段階におけるケア]から、『家族と相談しながら在宅看取りを調整した一例』の発表をしていただきました。司会は森尾真明先生（高知県立あき総合病院）、コメンテーターとして、木村信之先生（木村医院）、大倉佳宏先生（健生石井クリニック）に参加していただきました。終了後のアンケートでは、人生の先輩方の最期を若い医師が決断する重大さに気付いた、ポートフォリオの実例とブラッシュアップに立ち会うことができよかった、等の感想が寄せられました。

メイン講演会は、藤沼康樹先生（生協浮間診療所 所長/医療福祉生協連家庭医療学開発センターCFMD センター長）より、「家庭医的思考とはなにか？」をご講演いただきました。時々笑いも起きながら、新たに専門研修を始める先生だけでなく、学生からベテラン医師まで、最後まで興味深く聞かれていたのが印象的でした。

閉会の挨拶は、阿波谷敏英先生（高知大学）にいただきました。来年度も新専攻医オリエンテーションを開催しますので、専攻医・指導医に限らず、みなさまの参加をお待ちしています。



第1部の臨床推論では、研修医 三上先生の症例提示スライド1枚目の「44歳 女性 主訴：腹痛」から救急外来での診断戦略を展開してくださいました。研修医の意見や考えを引き出しながら診断を進めていきます。最初の10秒でABC (Airway, Breathing, Circulation)を確認、問題なければ、次の1分間は患者に集中、2分目からカルテ記載しながら診察、5分以内に採血・造影CT・入院がそれぞれ必要か判断する。痛みの訴えがあれば、すぐ診察を行う。など、志水先生の思考が泉のように言葉としてあふれ、会場は志水先生の言葉をしっかりと吸収していききました。あっという間に100分が過ぎ、第2部の講演 志水太郎先生「救急外来における意識障害」は、第1部の症例に関連して、閉塞性尿路感染症から意識障害に至った場合は、ウレアーゼ産生菌により尿素が分解され生成されたアンモニアが吸収されて高アンモニア血症となり意識障害が発生することがある、といった内容も含まれていました。



最後に会場から、髄液検査の適応やタイミングについて質問があり、細菌性髄膜炎を疑えば治療開始が遅れないために、実際の検査と治療の方法を伝授頂きました。

若い先生からベテランの医師まで学びの多い講演会となったと思います。

香川県まで足を運んでくださり最先端の診断戦略を見せてくださった志水太郎先生、また、GMカンファレンスへご参加頂いた先生方に深く感謝申し上げます。



★ 総合診療セミナー 「総合診療における臨床研究」を開催します

所属： 高知大学医学部家庭医療学講座 岩下演久

このたび、高知家総合診療プログラムでは2025年7月13日(日)に「総合診療における臨床研究」をテーマとしてセミナーを開催いたします。

講師として高知大学医学部臨床疫学講座の佐田 憲映先生をお招きし、「臨床研究をもっと身近なものとするために」と題しまして、ワークショップ形式で行います。初学者向けの内容とはなりますが、難しいイメージでなかなか取り組みにくい分野とされる臨床研究について、共に課題を解決しながら勉強していけたらと考えております。

総合診療以外の専攻医、研修医、学生、もちろん指導医も大歓迎です。

なお、この研修会は、日本プライマリ・ケア連合学会の専門医・認定医・認定薬剤師の更新の単位取得、新家庭医療専門研修の Off-JT の単位取得が可能です。

多くの方のご参加をお待ちしています。

【セミナー詳細】

テーマ：総合診療における臨床研究(臨床研究をもっと身近なものとするために)

講師：高知大学医学部臨床疫学講座 教授 佐田憲映 先生

日時：2025年7月13日(日) 17時～18時30分

場所：ちより街テラス(高知市知寄町 2-1-37) 会議室 3
(立体駐車場 3F 無料)

注：現地参加のみとなります。

参加費：無料

対象：医学生、臨床研修医、専攻医、指導医、薬剤師、看護師、医療関連職の方、大学教員

定員：20名

※この研修会は高知家総合診療専門研修プログラムが(一社)高知医療再生機構専門医等養成支援事業としておこなうものです。

一般社団法人 高知医療再生機構 令和7年度 専門医等養成支援事業
高知大学医学部FD 発展講習

令和7年度
第1回

高知家総合診療専門研修プログラム
総合診療セミナー

総合診療における臨床研究

「臨床研究をもっと身近なものとするために」
ワークショップ形式で行います。難しいイメージのある
臨床研究について、話し合いながら共に学びましょう



日時
'25 7月13日(日)
17時～18時30分
セミナー前に、60～90分程度で専攻医の
ポスター発表会を予定しています。

会場
ちより街テラス 会議室3
(高知市知寄町2-1-37)
立体駐車場3階 無料利用可

講師: 佐田 憲映 先生
高知大学医学部 臨床疫学講座 教授

対象	医学生/臨床研修医/専攻医/ 指導医/看護学生/看護師/医 療関連職の方/大学教員	申込		申込期限 6月27日(金)
定員	20名	上記QRコードからお申し込みください		

主催: 高知家総合診療専門研修プログラム
〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮 高知大学医学部家庭医療学講座内
電話&FAX: 088-880-2761 E-mail: kochisogopg@gmail.com

【研修会単位】

日本プライマリ・ケア連合学会の以下の単位が取得できます

■専門医・認定医更新のための単位	1.5 単位
■Off-the-job トレーニングの認定単位	1.5 単位 領域：研究
■プライマリ・ケア認定薬剤師の認定単位	1 単位

【申込】

こちらのフォームからお申し込みください ⇒ <https://forms.gle/dMvijqBstDwQM4tZA>

申込期限は6月27日(金)です。定員に達し次第募集終了しますので、お早めにお申し込みください。

★ 第25回日本プライマリ・ケア連合学会四国ブロック支部地方会、第32回四国地域医学研究会 合同学術集会のご案内(第一報)

大会長： 的場 俊(高知県立あき総合病院)

『第25回日本プライマリ・ケア連合学会四国ブロック支部地方会・第32回四国地域医学研究会 合同学術集会』を、高知県支部が担当で、高知県安芸市にて下記の日程で開催させていただく予定です。

- 日程 1日目 2025年11月15日(土) 午後2時から
2日目 2025年11月16日(日) 午前8時30分から
- 会場 高知県安芸市 高知県立あき総合病院やまのホール (オンラインのハイブリッド開催予定)

● プログラム内容

【第1日目】

- 13:00～ 四国地域医学研究会総会
- 13:30～ 受付開始
- 14:00～ 開会式
- 14:10～ 特別講演 理事長 草場鉄周先生
- 15:00～ シンポジウム
- 18:10～ 四国ブロック支部総会
- 19:00～ 懇親会 会場：ホテル TAMAI

【第2日目】

- 8:30～ ポートフォリオ発表会
- 9:30～ 一般演題
- 12:30～ 閉会式

● お勧めの宿泊施設

- ホテル TAMAI (安芸市) 車で5分 徒歩15分
- メルキュール高知土佐リゾート&スパ(芸西村) 車で20分 ごめんなはり線で30分
- 高知黒潮ホテル(香南市) 車で30分 ごめんなはり線で35分

※ ホテル TAMAI (安芸市) は11月15日(土)のみ、学会参加者は優先的に宿泊できるようホテルに依頼しています。
予約をとる際に、学会参加の旨、申し出いただければ予約しやすいです(50室、先着順)。

● 託児所 県立あき総合病院の院内託児所が利用可能の見込みです。後日、詳細をお知らせします。

● シンポジウム テーマ 「ACP と看取り」

ここ数年、国内で積極的に取り組まれています、皆様の現場でもなかなかうまく進んでいないのが現状かと思っています。当院が立地する安芸市でも「住み慣れた町で暮らす・希望すれば自然な看取りができる」ため、10年余、ACPの取り組みを行なってきました。今回は8名(予定)の方にシンポジストとして登壇いただき、それぞれの分野からACPの取り組みを報告していただき議論を深めていきたいと考えています。

1) 教育機関から見たACP教育と問題点

- ① 医学教育から見たACPと看取り ～医学の立場で～
埼玉医科大学 医学部国際医療センター 緩和医療科 教授 内田 望 先生
- ② 看護教育から見たACPと看取り ～看護学の立場で～
高知県立大学 看護学科 准教授 森下 幸子 先生

2) 現場から見たACPの取り組みと問題点(登壇者 調整中)

- ③ 看護師から見たACPと看取り
- ④ ケアマネジャーから見たACPと看取り
- ⑤ 行政から見たACPと看取り
- ⑥ 診療所から見たACPと看取り
- ⑦ 介護施設から見たACPと看取り
- ⑧ 急性期病院から見たACPと看取り

第25回 日本プライマリ・ケア連合学会四国ブロック支部地方会
第32回 四国地域医学研究会 合同学術集会

～ ACPと看取り ～

会 期 令和7年11月15日(土)～11月16日(日)

会 場 高知県立あき総合病院 やまのホール および ZOOM

大会長 高知県立あき総合病院 的場 俊

学会事務局 高知県立あき総合病院 経営事務課
〒784-0027 高知県安芸市芸西町3-2-2
TEL0887-34-3111 FAX0887-34-2687 E0620103@ken.pref.kochi.lg.jp

【新しい総合診療専攻医のご紹介】

2025 年度は四国に 8 名の新専攻医が誕生しました。掲載のご許可をいただいた 5 名の方を五十音順にご紹介させていただきます。また、ご寄稿いただいた方は自己紹介文、写真も掲載させていただきます。四国ブロック支部として、これからも専攻医の活躍を応援して参ります。

上田 敦史 先生（徳島健生病院）

※お名前、ご所属のみのご紹介です

壁谷 篤仁 先生（高知県立あき総合病院）

はじめまして、高知県立あき総合病院で勤務しております、壁谷篤仁（かべやあつひと）です。今年度より高知家総合診療および新家庭医療専門医プログラムに参加しています。初期臨床医研修は現在勤務している高知県立あき総合病院で行い、専攻医として引き続き同病院で勤務させていただいております。

現在の私ですが、研修医時代から引き続きの患者さんを含めて診療する毎日です。研修医の頃と比べて事務作業が増えたことや研修医や学生の指導などの仕事も始まり、業務内容も少し変わってきました。どうにか日々の業務を行いながら指導医の先生方の元、頑張っております。私の大きな目標として、『とにかく話を聞いてくれて、なんでも相談の窓口になってくれる医師になる』というものがあります。目標にはしてみたものの、漠然としすぎているせいなのか、これがなかなか難しく思うようにいかないことも多いです。苦戦しながらもスタッフの皆様に支えていただきながら成長し、いつかその様な一人の人間になれたらと思っておりますので、どうか寛大な心で見守っていただければと思います。

さて、大きな目標とは別に私個人としての今後の目標もあります。それは『歩く歩数をどうにか増やすこと』です。私はもともと東京で幼少期を過ごし、大学進学に際して高知県に遥々やって来たわけですが、来てからというもの生活が一変しました。私が幼い頃には我が家にも車がありましたが、高校生の時には廃車になっておっており、そもそも我が家の車には年に 2～8 時間程度しか乗せてももらったことはありませんでした。日常の大半は電車と徒歩の生活であり、中高生時代は毎日 8 kg くらいの重たい鞆をもって片道 25 分程度は徒歩で通学しておりました。そんな私も今では車が必需品となりました。大学 1 年生の時に車の免許を取り、以降生活の移動手段の大半は自家用車になりました。高知県では公共交通機関も他県に比較し便利とはいえないところもあり、自然と歩かない生活に慣れてしまいました。高知県は日本一歩かない県として知られており、私自身もその例外ではなかったようです。患者さんを診察する際に私自身が不健康であってもよくないので、今年は歩く歩数を増やせるように精進したいと思います。

今年度のプライマリ・ケア連合学会四国地方会は高知県立あき総合病院で行われます。安芸市は三菱創業者の岩崎弥太郎の生家や武家が多いため昭和の時代には有名な書道家を複数排出したことで知られます。市内にはいくつか記念碑も建っており、その他にも野良時計やその他様々なお散歩スポットが存在するようです。いらした際には皆様と観光がてらお散歩もできたらと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



谷川 莉理花 先生 (香川大学医学部附属病院総合診療科)

私は香川大学医学部附属病院総合診療科の谷川莉理花と申します。この度、総合診療新専攻医となりました。

私は高松出身で、高松第一高校卒業後、香川大学医学部に入学しました。そして香川大学の初期研修プログラムに所属し、その後香川大学医学部附属病院総合診療科に入局しました。



初期研修や後期研修先を県外の病院にすることも考えましたが、香川が好きで香川に残ることに決めました。香川は自然が豊かで温暖で、県民の性格も温和、コンパクトで、素敵な観光地もたくさんあり、とても良いところだと私は考えています。そのため、生まれ育った地でもあり、大好きな香川の医療に貢献したいと考えています。

話が変わりますが、私が総合診療科を選択したきっかけの一つに祖母の在宅診療の体験があります。当時の記憶はかなりあいまいになってしまいましたが、祖母は乳癌の末期で在宅診療を受けていました。ある日、祖母は痛みや不安で辛そうな様子でしたが、往診の直後、不安が和らいだのか穏やかな表情をしていました。それを見た私は、医師という存在の大きさに驚くとともに、自分も病気で苦しむ患者さんを安心させ、笑顔にできる存在になりたいと考えるようになりました。患者さんは病気だけでなく、精神的な問題や家族、経済的、社会的な問題も抱えていると思います。そういった背景も含めて、患者さん自

身と向き合い、その方の生活を少しでもよりよいものにできるようなお手伝いをしたいと考えています。

さてそんな私ですが、2年前に股関節の痛みが出現し、股関節臼蓋形成不全の診断を受けました。その後、徐々に痛みは増悪、毎日痛みを感じ、悪化する不安と向き合うつらさを実感しました。スポーツが趣味でしたができなくなり、日常生活にも少し支障がでてきて、両側の骨切り術を受けることを決めました。今度は手術に対する不安や、術後も再度痛みが出てくるのではないかとという不安を感じています。自身が股関節臼蓋形成不全の診断を受ける前は、命に関わらない、手術をすれば治る、たいしたことのない疾患という認識でしたが、そんな疾患でさえ非常に苦しみます。ましてや、日々の診療でお会いする患者さんの病気と向き合うつらさ、将来への不安はいかほどのものかと思います。患者さんへの尊敬の念を常に忘れず、気持ちに寄り添い、診療を行っていきたいと思います。

まだまだ至らない点ばかりですが、ご指導のほどどうぞよろしくお願いいたします。



宮川 友結 先生 (香川大学医学部附属病院総合診療科)

初めまして。今年度香川大学総合診療科に入局した宮川友結(みやがわゆう)と申します。

私の出身地は栃木県矢板市という三万人ほどの町で、家の前は麦畑という環境で育ちました。歌うことやラジオを聴くこと、建築物を見ることが好きです。3人姉妹の真ん中で、2個上の姉と10個下の妹がいます。母はケアマネジャー、父は林業に携わっています。

小さい頃から母の仕事に連れられて、利用者の方のご自宅やデイサービス施設に行くことがあり、地域で生活する患者さんとそれを支援する介護・医療従事者というイメージが形成されていきました。大学に入学したときは精神科を志望していましたが、外来や病棟で接する患者さんよりも地域で生活する患者さんに興味があることに気づき、総合診療の道を選びました。

最近、母から聞いた話で印象に残ったことがあります。それは母が担当した元銀行員の50代の方でALSのために自宅療養することになった方についての話でした。その方はラーメンが好きで、以前はよくラーメン屋に通っていたそうです。しかし、症状が進行しラーメン屋に行けなくなったと母にこぼしたことがありました。それを聞いた母は知り合いの元板前のおじさんに声をかけて、ラーメンをその方に振る舞ってくれないかをお願いをしました。母はラーメン丼とレンゲを用意して、母の事務所の一階にある交流スペースにご本人、奥様、息子さん二人をお招きしました。ゆっくりと時間を過ごし、大変喜ばれて帰ったとのことでした。この話を聞いて純粋に自分もこんなことがしたいと感じました。身体症状としてのマイナスをゼロにする、という視点だけでなく、地域、家族、職場など環境によっても異なるその人が生きたい実際の健康や生活をご本人やご家族、周囲のサポートする人たちと共有し、その達成のためのお手伝いができる医師になりたいと思っています。



興味があっちこっちに向いて、まとまりのない自分ですが、今はまず医師として経験を積む時期です。どうか皆様ご指導ご鞭撻をお願いいたします。

渡部 京介 先生 (徳島健生病院)

徳島健生病院 総合診療科専攻医の渡部京介と申します。

私は徳島県で生まれ育ち、大学も徳島大学、そして初期臨床研修も現在勤務している徳島健生病院で行いました。こうして振り返ると、ずっと徳島県に育ててもらってきたのだなと感慨深い思いです。

私が医師を志したのは高校2年生の春、担任の先生に勧められて参加した高校生向けの医療体験がきっかけでした。もともと私は病院嫌いで、それまで医療の道に進むなんてことは全く考えていなかったのですが、そのときの外来見学で、患者さんの生活背景を把握しながら和やかに診療を行う先生の姿を見て「こんなに温かい医療の形があるのか」と感銘を受け、医療に興味を持ち始めました。学部生になってからもその思いは変わらず、プライマリ・ケアに強く魅力を感じて徳島健生病院で初期研修をさせていただきました。

現在、私が総合診療科を選んだ理由には先に述べたような経験のほかにも、臓器の枠を超えて全身を診られるようになりたい、そして患者さんご本人だけでなくご家族やその方を取り巻く環境にもアプローチできるようにになりたいという思いがあります。中でも特に「医療を必要としているのにさまざまな事情で医療にアクセスできていない人たち」にもっと寄り添いたいという気持ちが強くあります。



たとえば、私の母はかつて仕事が忙しくて受診できず、ようやく受診した際に医師に怒られてしまいますま

す病院を避けるようになってしまったことがありました。また、半年以上ぶりに外来を受診された高血圧症の患者さんは、「治療が必要なのはわかっているし、治療の効果も実感できているけれど、仕事と子育てで忙しく通う時間がない」と話されていました。ある日救急車で来院された心不全の患者さんは、「認知症の妻を一人家に置いて入院するわけにはいかない」と訴えておられました。

このような、「治療の必要性は理解しているのに実際には医療にアクセスできない」現実、どのように向き合っていけるのか。患者さんの生活や価値観に寄り添い、無理のない形で医療へとつなげていくことが、私の今後の課題であり、目標です。総合診療・家庭医療の分野であれば、そのようなニーズに応えるアプローチを追求できるのではないかと感じています。

まだまだ経験の浅い若輩者ではありますが、日々出会う患者さんや地域の方々との関わりの中から多くのことを学び、どんな場面でも患者さんの力になれるような医師を目指して今後も精進してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

★ 念願だった2冊の本の出版

所属：仁寿会 東洋病院 院長 谷 憲治

私は、長らく徳島大学で勤務している間、ぜひ執筆してみたい本が2冊ありました。大学に在籍している間は、とにかく医学研究に力を注ぎ、その成果を必ず英語論文として発表しなければならないという使命があったため、一般書の執筆は、なかなか業務の合間の優先事項に加えられないものでした。このたび、大学を定年退官して、そういった任務から解放されて2年が過ぎた今、その願いをかなえることができました。

執筆したかった2冊の本の1冊目は、「思春期・青年期 悩みの特効薬」というタイトルで2025年3月に青山ライフ出版社より発行しました。約50年前の自分自身の日記に記された高校生時代の感受性の強い時期の精神的な悩みを紹介し、その悩みを和らげようと読みあさった書物から教わった金言を一冊の本にしました。読んでくれた読者から「私も青春期に同じ悩みを持っていた」と共感が得られるのか、あるいは自分の思春期の悩みは自分独特のものだったのかを知りたいという願いも出版に込めていました。自分の子孫たちにこんな血のつながった先祖が存在していたのだということを伝える記録として残しておきたいという思いもありました。発行して3か月を過ぎると、この本が紀伊国屋などの各書店に並べられるようになりました。また、平惣書店の徳島出身著者のコーナーには数冊が陳列されているのをみかけました。自分の著書が一冊の紙の本になって書店に並ぶ景色は何とも言えない誇らしいものだということを生まれて初めて経験しました。読んでくれた知人たちからは「日頃の谷先生の言葉の背景にはこういう人生があったんですね(70歳代 元教授)」、「思春期になって口をきかなくなった孫の気持ちを知りたくて読んでみました(60歳代 外来患者)」、「谷先生の一生懸命生きてきた証が本になっているなんて素晴らしいです(20歳代 外来患者の娘)」などのうれしいコメントをいただいています。



2冊目として執筆したのは自分の専門領域である関節リウマチをテーマにした小説です。それは「私のリウマチ日誌〜リウマチ一むとの出会い〜」のタイトルで2025年5月に牧歌舎から出版されました。関節リウマチを

発症した架空の患者を主人公とし、私が現在勤務する東洋病院を診療の舞台として、関節リウマチとその治療によって生じる様々な課題に病院のチームとして対応していくというストーリーです。専門用語には注釈をつけて解説することで、リウマチ患者やその家族だけでなく、リウマチ診療やチーム医療に取り組む医療スタッフも読者の対象としました。右の図は職場のスタッフが作ってくれたこの本の紹介パンフレットです。この写真に写っている私以外の6名の病院スタッフは、看護師、薬剤師、PT/OT、MSW、事務員として診療チーム（チーム名称は「リウマチーむ」）を結成し、常日頃からリウマチ診療に関わっており、今回はこの本の執筆にも加わっていただきました。まだ、発売して間もないので届いた感想は少ないですが、とりあえず著者の中の一人のスタッフが作成した表紙や挿絵のセンスがよいと評判です。

こういう2冊の本を出版できたことで、一息ついている今日この頃です。どちらの本もアマゾンなどのネット販売や、有名書店の予約販売で購入できるので、ご興味のある方はぜひ手にしていただいて感想を送ってもらえればうれしいです。著者に入る印税がこんなに微々たるものだということが分かったことも本を出版してみても初めて知ることのできた成果のひとつです。



★ 四国ブロック支部役員会を開催しました

四国ブロック支部長 阿波谷敏英

2025年4月26日の新専攻医オリエンテーション・ポートフォリオ発表会に引き続き、香川大学医学部附属病院福利厚生施設棟2階マルチスペースをお借りし、四国ブロック支部役員会をハイブリッド開催しました。22名の支部役員に出席いただきました（うち、13名が現地参加、9名がWeb参加）。

議事では、2024年度事業報告および会計報告、2025年度事業計画および予算の審議が行われました。また、地方会およびポートフォリオの担当県、地方会開催マニュアル、ブロック支部会誌、ニュースレターの編集方針等について活発に意見交換がおこなわれました。後期研修プログラムのサイトビジットを2025年度実施に向けて前向きに検討する旨、植本先生より説明がありました。大倉副支部長より県支部単位の講演会等に補助を受けることが可能かとの質問がありました。以前より県支部単位の企画への補助はおこなっており可能であること、金額の上限は定めていないので、具体的な計画があった際に事務局に相談いただくようご説明しました。

PCAT研修会や、認定薬剤師の研修受入れについても検討いただきたいとのアナウンスもありました。

四国ブロック支部公式ブログを開設しました♪

支部役員会でのご意見も踏まえ、ブロック支部の公式ブログを開設しました。イベントのご案内など即時性の高い情報を、ホームページやニュースレターよりも、こまめに発信して参ります。右のQRコードからアクセスください。ブックマークして時々覗いていただけると嬉しいです。SNS等での拡散も大歓迎です。（事務局）

